

専任

プログラマー

登場人物 役者1／案内人

役者2／裸足の人

役者3／リュックの人

役者4／眼鏡の人

役者5／帽子の人

役者1、やってくる。

役者1 田舎道、一本の木、夕暮れ。うん、間違いない、ここだ。お客さん、着きましたよ。…あーあ、すっかりボロボロになってしまった。穴が空いておまけにひどい匂いだ。ここからじゃあさすがに良くわからないけど鼻を近づけたらきつとモゲテしまったらうな。そんなひどい匂いの物が僕の足にくっついてると思うと全く何をすることもやる気無し。一歩歩いてもうひどい匂い。一歩歩いてもうひどい匂い。三歩四歩と歩くとたびその匂いは増して行くんだから性質が悪い。さあ、お客さん着きましたよ。

役者1振り返ると、役者2が立っている。

役者2 やつぱりそうじゃないか、最初からここを待っていたら良かった。

役者1 あれ？お客さん？お客さん。

役者2 ここだ、ここに違いない。

役者1 すみません、その先に誰か居ませんでした？

役者2 いえ、誰にも会ってません。

役者1 ……そうですか。

役者2 あなた、眼鏡は？

役者1 私、目は良い方なんです。

役者2 という事は眼鏡は持ってます？

役者1 いません。

役者2 そうでしたか。それはそうですとも。

役者1 弱ったなあ、お客さん。

役者2 田舎道に一本の木、どこにもありそうな場所だというから他にも散々歩きまわってみたんです。役者1 あ、裸足だ。

役者2 どこにもでもありそうな場所なんていうのはつまりどこでもどこでも無きような場所と同じことですよ。その事によく気付いた私はここに戻ってきたという訳です。

役者1 ……田舎道、一本の木、夕暮れ。うん、何度確認しても間違いない、ここだ。あつてる。

役者2 私もたくさん見たあげくここに来てみるとやつぱりここしかないと思っただけです。

役者1 お客さん。

役者2 お客さんというのは？

役者1 おかしいなあ、さっきまで後ろに居たはずなんです。おしっこかなあ…。

役者2 それは、私の事ではないです？

役者1 ……何がですか？

役者2 私も、少し前ならお客さんだった事はあるんです。

役者1 ……は？

役者2 ここに来る前本屋に寄ったんですね、ちょうどその時私はお客さんでした。

役者1 ああ…。

役者2 違いますか？

役者1 あなたの事ではないようです。

役者2 ……そうですか。

役者1 お客さん。

役者2 本屋ではね、「正しい待ち方」という本を探してました、結局無かったんですが。

役者1 ……そうですか、お客さん。

役者2 私ね、ここで待っていたら赤い眼鏡を掛けた人がやってくるからその人を待つように言われたんです。だからある程度の覚悟を持ってここで待っているんですが…。

役者1 遅いなあ。どこまでおしっこ行っただ。

役者2 あなたのそれは、きつと正しくない待ち方ですね。

役者1 え？

役者2 この道は、こちらへ行くところに行くんです？

役者1 こちらへ行くところへ行きますね。お客さん。

役者2 ではこちらへ行くところ？

役者1 こちらへ行くところへ行きます。お客さん。

役者2 どちらも都会へ行くんですか？

役者1 そうです。お客さん。

役者2 はーん、あなたは地球は丸いんだという事を言っているのですね。

役者1 違います、ここだけが田舎なんです。お客さん。

役者2 なるほど、都立と都会の間には必ず田舎がある。東京と大阪の間に名古屋があるように。

役者1 すいません、私やっぱりお客さんを探しに行つて来ますんで、お客さんが来たらここに待つように言つて頂けませんか？

役者2 あ、わかりました。

役者1、去る。

役者2 でも私だつて人を待つているんです。その人が来たら私は行つてしまいます。という事をなせすく言えなかつたんだらう。

役者3、やつてくる。赤いリュックを背負つている。

役者2 やれやれ、こう地面がデコボコだと痛くてまともに歩けやしない。

役者3 あ…

役者2 …え？

役者3 …随分、待ちました？

役者2 いや、私は今来たところなんです…。

役者3 そつですか…。

役者2 え、まさか、あなたが？

役者3 いや、それは私のセリフでして、

役者2 え？

役者3 あなた、あなたですか？

役者2 なんという事だ！まさかこんなに早く会えるとは、

役者3 私です！

役者2 私はあなたを待つていたんです。

役者3 すみません、遅れてしまつて。

役者2 何をおっしゃる、待つていたのは私の方なんですから、さあ頭をおあげ下さい。

役者3 すみません、いや本当に驚いています。こんなにすぐに会えるとは夢にも思つておりませんので、

役者2 頭を上げて下さい。

役者3 てつきりもつと待つてものとはかり。

役者2 私ですすよ、だつて私、今さつき来たところですからね。本当にもうさつきなんです。

役者3 それを言うなら私なんか今来たところですからね。先に待つていて貰つてるんですから、こんなに恐縮することはございません。

役者2 もつ頭をお上げくださいな。

役者3 すみません。

役者2 どうか、よろしくお願い致します。

役者3 こちらこそ、よろしくお願い致します。

役者2 いやいやそんな。

役者3 いえいえ。

役者2 ええ。

役者3 よろしくお願い致します。

役者2 こちらこそ、よろしくお願い致します。

役者3 いやいやそんな。

役者2 いえいえ。

役者3 ええ。

役者2 私は、そんなに待たずにあなたに会えた。

役者3 私も、そんなに待たずにあなたに会えた。

役者2 ははは。

役者3 ははは。

役者2 では！

役者3 では！

役者2 はい。

役者3 はい。

役者3 …はい。

役者2 …おや？

役者3 …おや？

役者2 あなた、眼鏡は？

役者3 眼鏡は持つておりませんが…

役者2 …そうですか。

役者3 あなた、帽子は？

役者2 帽子？ありませんが…

役者3 …そうですか。これはとんだ勘違いで。

役者2 いやこちらこそ、すみません。

役者3 そうですよ、こんなにすぐに来るはずがない…

役者2 あ、あなたもしかしてお客さんですか？

役者3 なんの？

役者2 …さあ？

役者3 すみません、なんのお客さんかわからないと答えようが…

役者2 あの人は一体なんの商売をやっているんだ。

役者3 おや、裸足ですね。

役者2 靴が途中でダメになってしまいましたね、捨てて来てしまいました。

役者3 裸足で歩いて来たのですか？

役者2 まあ少しの距離なんですがね。ボロボロの靴を履いて待つよりは、いつこの方がいいんじゃないかな

役者3 いかと思ひまして。

役者2 なるほど。

役者2 私が会うのは特別な人なんです、失礼があつてはいけませんから。

役者3 いや、その気持ちはわかりますよ。しかし裸足はいけません。

役者2 なぜですか？

役者1、戻って来て、

役者1 お客さん、まだ来ませんか？

役者2 この方がお客さんでないならまた来てませんね。

役者1 そうですか…。お客さん。

役者2 あなた、なんの商売をされているんですか？

役者1 私は道案内ですよ。お客さん。

役者1、去る。

役者2 えつと、なんの話でしたっけ？ああそうそう、なぜ裸足は健康に良いかという話でしたね。

役者3 違います。裸足は特別な人と会う時に逆効果だという話です。

役者2 ああ、そうでした。え、それはなぜなんです？

役者3 だってあなた、裸足ですよ。

役者2 そうですが、それがなんで？

役者3 幾らなんでもあなた、裸足過ぎますからね。

役者2 …裸足過ぎるとはどういう事ですか？裸足に「過ぎる」があるんですか？え、骨が見えてると

いう事ですか？え、骨が見えてるんですか？！

役者3 どれどれ？

役者2 あー驚いた、骨は見えてませんでした。

役者3 驚いた、骨が見えてるのに歩いて来たのかと思いました。それはそれで感動に値しますが。

役者2 さすがに骨が見えるまで歩いていたら、骨が見える寸前ところで痛くて歩くのを止めると思い

ます私。

役者3 あなたね、それはかなり我慢強い、私なら肉が見える寸前のところで歩くのを止めます。

役者2 なんの話でした？焼き肉は骨付きに限るという話ではないですよ？

役者3 そんな話はしてません。裸足は特別な人と会う時に逆効果だという話です。

役者2 ああ、そうですよ。え、それはなぜですか？

役者3 裸足は、印象が強すぎるんですな。

役者2 印象？

役者3 このままではあなた、ずっと裸足の人ですよ。

役者2 いや、「はい、そうです」としか言いようが無いのですが。

役者3 一度裸足の人のレッテルを貼られたら、この先どれだけイヤイヤ靴を履いてもあなたは半永久的に裸

足の人ですよ。

役者2 そんなまじか…

役者3 そりゃあそうですよ、だってあなた今、現に裸足なんですから。

役者2 いやこれはだつて、ボロボロの靴を履いているよりはと思っただけですからね。

役者3 私ならすぐに靴を拾いに行きますがね。

役者2 だつて靴はボロボロなんです。

役者3 見て下さい、私の足元を。

役者2 …靴を履いている。どうしてそんなにきれいに履けるのか。

役者3 私も今から特別な人に会うんです、だから靴を履いている。

役者2 …そりゃあ私だつてね、こんなにキレイな靴なら履いていたいんですよ。でも私の靴はもうボロボロだつたんです。私だつてボロボロにしたくてボロボロにしたんじゃない、勝手になつたんです。しよがないでしょう、歩いていたら自然にボロボロになつていくんですから靴つてやつは、歩かずにここに来るなんてそれは不可能ですから、つまりここに来るイコール靴はボロボロ、そういう事になるんです。じゃああなたはどうかしてここに来たんですか？あなた本当にここまで来たんですか？

役者3 え、どうということ。

役者2 なんなんですか？なんの自慢なんですか？そんなに靴を履いている事が偉いんですか。

役者3 まあまあ、そう怒りなさんな。

役者2 なんなんですかもつ…。

役者3 実ほね、私もこれ、靴底が無いんです。

役者2 …え？

役者3 ほら。

役者2 …本当だ、足の裏が丸見えだ。

役者3 …ここに来るまでの間に穴が空いてしましましてね、その時思つたんです、「いっそ靴底を全部取つてしまえばこれはもう穴じゃない、こういう靴なんだ」とね。

役者2 …靴底をとつてしまつてはそれはもう靴じゃないでしょう。なんだろう？足の甲とかくるぶしとかを覆つカバーですよ。

役者3 いやいや、こういう靴なんです。

役者2 うん、幾らそう思い込んだつてそれは靴じゃない、靴の皮と言つてもいい。

役者3 いやこういう靴なんです。

役者2 靴じゃないです。

役者3 だつてあなたこれを見て、「靴を履いている」と仰つた。見た目に靴を履いているように見えたなら、あとは私自身の問題です。「私が靴を履いている」と思えばそれは紛れもなく靴を履いているんです。

役者2 じゃあ聞きますが、靴は何を持って靴なんですか？

役者3 靴は持つものじゃない、履くものです。

役者2 わからん人だなあ。だつてあなた、デコボコしたところを歩くと痛いでしょうそれは裸足と一緒にじゃないですか。

役者3 いやいや、こういう靴なんです。そう思えばちつとも痛くない。

役者2 そんな精神論の話じゃなくて、じゃああの辺、あの特にデコボコしたところをスキップしてみてもいいよ。

役者3 なんて楽しくもないのにスキップしなきゃいけないんですか、イヤです。

役者2 だつて痛くないんですよ？スキップしてみせてくださいよ。

役者3 楽しくないのにスキップするバカがどこにいますか、イヤです。

役者2 スキップすると自然と楽しくなるんですよ、ほら。

役者3 あなた何で急にスキップしてるんですか。

役者2 あなたがしないからでしょう！じゃあわかりました、スキップじゃなくなつていい、あの辺をちよつと駆け抜けてみて下さいよ。

役者3 私はこれから大切な人に会うんです。そうしたらまたたくさん歩かなきゃならないきつとね。無駄な体力を使いたくないんです、イヤです。

役者2 見栄えだけ良かったつてダメなんですよ、あなたは心の汚い人間だ。

役者3 私は一点の曇りもなく、純粹にこういう靴を履いているんです。

役者2 なんて頑固な人なんだ。

役者3 頑固じゃない、こういう靴を履いているんです。

役者2 …こんな事がまかり通つていいはずがない、こんな事が。

役者3 私は赤い帽子を破つた人を待つているんです、裸足のあなたにどう思われても結構。

役者2 あなたは靴を履いているように見せかけ本当は裸足だ、いつか必ず化けの皮が剥がれますよ。そういう言つてるところへ誰か来ましたよ。

役者4、「昭和枯れすすき」を歌いながらやつてきた。

赤い眼鏡を掛けている。

役者2 …また香気な人がやつてきた。ここはああいう香気な人が来ちゃいけない場所なのに、どうなつているんだ。

役者3 眼鏡を掛けていますね。

役者2 なんですとー…あなた、あなたは！

役者4 すみません、一番だけは歌わせて下さい。(歌い終えて)そう言って一番を歌い終えたところでおや？二人も人が居る。んー？

役者2 お待ちしておりました、赤い眼鏡のお方！

役者4 いやこれはね、度が入っておらんのですよ。私はただ赤い眼鏡を掛けてここへ待つように言われただけですからね。

役者2 ありがとうございます！これで私は救われた。

役者4 おや、なんでですかやめてくださいな、なんでですか？

役者2 よくぞ、こんなに早く来て下さいました。てっきり私は今日中には来ないものばかり思っておりました。

役者4 はて、なんで私はこんなに感動されているのやら…。

役者2 どうだ、見なさい！この方も裸足じゃないか！私の裸足は間違っていないかった！

役者3 ああ、本当だ。裸足ですね。

役者2 おー、赤い眼鏡のお方。

役者4 ちよいとちよいと、そんなに急に距離を詰めるのはやめて頂戴。だいぶ裸足に慣れてきたとは言え、まだ走れるまでにはなっていないんですから、痛い痛い。

役者2 どうか、よろしくお願い致します。

役者4 何を？

役者2 これから。

役者4 これから、何を？

役者2 それはもう、あなた次第です。どこへなりともついて行きますぞ私は。

役者4 いやいや、ちよつと落ち着いてくださいな、痛いから。いえね、私はここで人を待っているんです。だからまだどこへも行きませんよ。

役者2 え？

役者4 こうして何日もここへ来て待っているのですが、一向に現れる気配が無いんです。赤いリュックの人物は。

役者2 赤いリュック…？

役者4 田舎道、一本の木、夕暮れに赤いリュックの人物がやってくる。はずなんですがね…。ここは昨日来た場所とは違うのかな？良く似ているが、違つかもしれない…。

役者3 (自分のリュックを指さし)これは、赤いリュックですか？

役者4 おおー、赤い！それはまさに赤いリュックーちよつと、ちよつとお待ちください…。

役者3 なんですかなんですか？

役者4 いや、まだ裸足生活に慣れておりませんのでこちらへ行くのに時間が掛かるんです。ちよつとお待ちください。痛い痛い。

役者3 待つてください、こちらへ来なくても結構ですから。

役者4 いえ、行きます。お待ちください。私はあなたをずっと待つておったんです。今に行きますから。

痛い。

役者3 いや本当に、そんな思いまでして…

役者2 眼鏡の方、眼鏡の方お待ちください。

役者4 痛い、痛いぞ。

役者2 そうだ、肩をお貸ししましょう。

役者4 いや結構。私はこうして歩いて来たんです。今までずっとこうして歩いて来たのですから、リュックの方を前にして無様な格好はお見せできません。痛い、痛すぎる。

役者3 あなた、相当内臓が悪いのではないですか？

役者4 さすがは赤いリュックのお方、見ただけで分かるのですか？

役者3 足ツボです。

役者4 足ツボ？

役者3 足裏全体が痛いのですか？

役者4 はい、もう全体が痛いんです。治して下さい。

役者3 私にそんな方はありませんが、

役者2 眼鏡の方、あなたその、肩から提げているそれは？

役者4 そうだ、靴を履けばいいんだ。私はもう赤いリュックの方に会った。もう履いてもいいんだった。やはりそうか、それはちよつとしたバッグかと思つたが、靴だったのでね！

役者4 そうなんです。靴というのは履くと必ず穴が空く。そうやってしまつてはいざという時になんかの役にも立たないですからね。だから私は、いざという時の為に靴を履かずにとつておったんです。こう

して肩から提げていればハンドバッグ代わりにもなりますからね。これくらい口の空いてればまずだいたいの物は足りる。どうぞ。

役者2 なんですかこれは？

役者4 胡桃です。

役者2 胡桃？

役者4 もう私には必要ありませんから。

役者2 胡桃？

役者4 非常食にとっておいたんです。

役者2 胡桃を？

役者4 汚くはありませんよ。だってこの靴は新品なんですから。靴に入っていたとて新品の靴の匂いし  
かない。

役者2 私は、眼鏡の方から胡桃を頂いた！

役者4 私はこれからこの方について行くのです。よし、履けた。はああああ、なんという事だ、なんな

んだこの気持ち良さは、私は、まるで羽が生えた気分ですぞーあはは、あはは、あはは！

役者2 ああ、眼鏡の方が、眼鏡の方が、妖精のようだ。

役者1、やってくる。

役者1 お客さんは、まだですか？

役者2 まだですね。

役者1 お客さん！お客さん！

役者1、去る。

役者2 いや、私はお客さんを知らないので、あなたがこの人達を見て違うならまたなんでしょう。と今  
言ってもしょうがない。

役者4 さあ行きましょリユックのお方！私は今、どこへでも行けませんぞ。

役者3 そう言われましても、私はまだどこへも行かないのでね。

役者4 なぜですか？私は靴を履いたんです。いざという時の為に大切にとっておいた靴を履いたのです  
よ。

役者3 私は帽子の方を待っているのです。それまではどこへも行くとはいわないのです。

役者4 いざという時、それはあなたが「行く」と言ったその時です。そうです、私はいざとなったら走  
る事だって出来ます。見てください、今の私はまだいたい何を踏んでも痛くない。これで私はまだ  
いたいのところへは行けるといふ訳です。あはは、あはは、あははは。

役者2 おおー、やはり妖精のようだ。

役者3 おやめ下さい、そんなみつともない。

役者4 何をおっしゃるんです、私は心から喜んで居るのです。裸足の友、飛んでも楽、跳ねても楽とい  
うのはなんて楽しい事なんでしょうね。あはははは。

役者2 靴だ、半端ない靴の威力だ。

役者3 しかしあなたの内臓は良くなった訳じゃない。

役者4 さあ、言つて下さい。いざという時を、その時私は韋駄天になる。

役者3 いざ。

役者4 サササ。

役者3 いざ。

役者4 サササ。

役者3 いざ。

役者4 サササ。どうですか？

役者3 あなたがいざ

役者4 サササ。

役者3 という時にいかに動けるかはよくわかりました。でも私はまだそのいざ

役者4 サササ。

役者3 という時ではないのです。

役者2 私にはいざ

役者4 サササ。

役者2 という時がやってきた。なのに私にとってのいざ

役者4 サササ。

役者2 は、眼鏡の方にとつてのいざ

役者4 サササ。

役者2 とは違うようだった。

役者4 いざという時は本当に思いも寄らない時にやってくるものですか

役者2 いざ。

役者4 サササ。その時の為に私は

役者2 いざ。

役者4 サササ。もうよしてくれないか。せつかくの靴がすり減ってしまふ。靴はその辺のところがいけ

ない。あー、底がもっ…。

役者3 すみませんが眼鏡の方、私はまだ行けません。どうしても行くとなれば、どうぞお先に。

役者4 あなたを待っていたのにあなたを置いて行けますか。

役者2 もついいではないですか、先に行きましょう。

役者4 どこへ？

役者2 それはあなたが決める事。

役者4 それはこの方が決める事。仕方ない、私も一緒に待つことに致します。

役者3 そうですか、それはなんだか、悪いです。

役者2 眼鏡の方、そんな人を相手にしてはいけませんよ。そいつは靴を履いているように見せかけ本当

は裸足なんですよ。

役者4 裸足？

役者2 そうです、あいつは嘘つきですよ。

役者3 私は嘘はついてない。

役者4 どうみても靴を履いているではないですか。まさか、心の清い人しか見えないという靴を履い

ているのですか。

役者2 バカか、そんなものがある訳ないでしょう。

役者4 じゃあ一体…、

役者3 君、今この人に向かってバカって言ったろ。

役者4 え？

役者2 言ってる。

役者3 言ったじゃないか。

役者2 パカバカって言ったんだ。

役者3 なに？

役者2 馬の足音だ。

役者3 なんて今馬の足音が必要なんだ。

役者2 さあ見せかけの救世主、正体を見せてみる。

役者3 なんて今馬の足音が必要なんだ。

役者2 さあ見せてみる、足の裏をこちらに向けてみる。

役者3 わかりましたよ、ほら。

役者4 おお、靴底が無い。

役者2 どうです、こいつはかっこつけただけの世俗にまみれた愚か者です。

役者4 見た目はまるで普通の靴を履いている、なのに底が無い。これは凄い、あなたからはある種の哲

学を感じます。

役者2 眼鏡の方…。

役者3 もつよして下さい、私は靴を買うだけのお金が無い、ただの貧乏人ですよ。はっはっは

役者2 見て下さい、おだてられて調子に乗るような奴ですよ。

役者4 靴底が無いということはその靴、そのまま膝小僧の辺りまで上がるんじゃないですか？

役者3 そうですね？

役者4 凄い！まるで膝に足があるような不思議な錯覚に陥る。

役者2 もお眼鏡の方…。

役者4 その状態で膝小僧を地面につけたらそれはもう小人だ。

役者3 そうですね？

役者4 おお、やはりそうだ！ちよつとつま先立ちみたいになっているが、これはこれでなんだかわい

い。

役者2 眼鏡の方、おちやめすぎます。

役者3 ダメだ、猛烈に膝小僧が痛い。

役者4 面白い靴だ。

役者2 眼鏡の方、こやつは滑稽な姿に騙されてはいけません、これは靴ではないのです。

役者4 うるさいなあ君は、私はずっとこの方を待っていたのです。君にとにかく言われる筋合いはあり

ません。

役者2 そんなあ、私はあなたを待っていたのですよ、それなのに。

役者4 君に待たれた覚えはありません。これ以上リュックの方を愚弄するなら君はもう私を待たないで

頂きたい。

役者2 あー、私は心に穴が空いた。

役者3 まあまあ、彼も必死なんですよ。はっはっは。

役者2 貴様、調子に乗りやがって…。

役者4 寛容なお方だ。あなたのような方が待つている人物とは一体…？

役者3 はて、どんな方なのやら、まだ現れませんから。

役者4 それは是非、会ってみたいものです。

役者2 ああ、こんなことなら靴を捨てなきゃ良かった…。



役者1、戻って来て、

役者1 お客さんが居ないんです…。お客さん、お客さんはどこですか？

役者4 お客さん？はて？

役者2 この人はさっきからずっとお客さんを探しているんです。まだ見つかりませんか？

役者1 ええ。困ったなあ、私はお客さんを見失ってしまった。

役者3 あなたの言うお客さんとはまさか、赤い帽子を被った人ではないでしょうね？

役者1 とんでもない！お客さんはそんなもの被っちゃいません。

役者3 そうですか…。

役者1 しようがない、どこかに手ごろなロープは無いですか？

役者2 ロープ？いや、ロープは無いですねえ。

役者1 そうですか…。

役者1、歩きます。

役者2 あなた、まさかロープを使って死ぬつもりじゃないですか？と言いたい。

役者4 えっあなたロープを使って死ぬつもりですか？

役者1 あ、はい、そうしようと思つて。

役者4 えっ！

役者1 お客さんを見失ってしまった案内人に生きている資格はないですから。あ、ロープありました？

役者2 ロープは無いんです…。

役者1 そうですか、ロープ、無いかなあ…。

役者4 もう少し森の奥へ入って行けば手ごろなロープはあるかもしれませんが、それは誰かの使い古しでしようからね…。

役者1 誰かの使い古しだつて構やしない。私ちよつとロープを探しに行つて来ますんで、お客さんが来たらそう伝えて下さい。

役者1、去る。

役者2 お客さんが来たらあなたは死ぬ必要は無くなるんじゃないですかね。…という事をなせずに言えないんだ私は。

役者3 それは言つた方がいいですよ。

役者2 そうですよねやっぱり。

役者3 言つて来なさい、今ならまだ間に合つ。

役者2 すいませーん。

役者3 こんな所から呼んだつてダメですよ。

役者2 遅かつたか…。

役者3 ほら、またその辺に居ますよ、行つて来なさい。

役者2 いえ、もう仕方ない、すぐに言えなかつた私が悪いんです。

役者3 あなたね、本当に悪いと思うなら止めに行くべきですよ。

役者2 はあ。

役者3 だから行つて来なさい。

役者2 …いやいいです。

役者3 は？

役者2 いいんですもう、ほつといて下さい。

役者3 そうやつて後悔するなら止めに行つたらいいじゃないですか。

役者2 いいんです、私は行きませんから。

役者3 なんてなんだ？

役者2 じゃああなた行つたらいいじゃないですか。

役者3 なんて私が行くんですか？

役者2 そんなにあの人が気になるなら行つたらいいじゃないですか。

役者3 だからなんでそうなるんですか？私は行きませんよ。

役者2 じゃあ私も行きません。

役者3 私は、ここで帽子の方が来るのを待っているんです。あなたはもう来たからいいじゃないですか、ねえ？

役者4 私はあなたが動くまで動きません。

役者2 私だつてあなたが動くまで動きません。

役者3 じゃあ誰も動かないじゃないですか。

役者2 そうなんですよ。

役者3 どうするのあの。

役者2 だからもうイイって言ってるじゃないですか。

役者3 ひどい話だ。人が一人今にも死のうとしているのに何も出来ない人がいる。

役者2 三人で行きますか？一緒に。

役者3 行きませんよ、待ってるって言ってるでしょう。

役者2 ほら、行かないんですよ誰も。

役者3 行きなさいつら。

役者2 行きません。

役者3 行きなさいよ。

役者2 だって私が行ったら、あなた達どっか行っちゃうでしょ？

役者3 は？

役者2 ねぇ眼鏡の方？行っちゃいますよね？

役者4 私はリュックの方が行かない限り行きませんよ。

役者2 だからイヤなんですよ、あなたは行くでしょ？

役者3 行きませんよ、だって私は帽子の方を待ってるんですから。

役者2 うんそう、だから私が行ってる間に帽子の方が来たら、私を置いて行っちゃうでしょ？

役者3 行きませんよそんな。

役者2 行く行く、絶対行く。

役者3 そりゃまあ帽子の方が行くと言ったら、まあ行くんですけどね。

役者2 ほらあ！もう絶対行かない！

役者4 裸足の方、ここはあなたが行くしかないですよ。

役者2 眼鏡の方…？

役者4 どうしてかを私に答えさせるのですか？

役者2 私はあなたにやると会えたんですよ、離れません。

役者4 またわかりませんか、この中であなたが一番下つ端なんですよ。

役者2 …下つ端？

役者3 眼鏡の方、それ以上は…。

役者4 あなたはリュックの方や私の言うことに「はいはい」言ったりやいんです。

役者2 …え？

役者3 眼鏡の方、それははっきり言い過ぎです。がそれは確かにそうなんですよ裸足の。

役者2 なんですと？

役者4 あなたは言うなれば金魚のフンに食らいつくバクテリアだ。さあ、行って来なさい。

役者2 …バクテリア？

役者4 そう君はバクテリア。行って来なさい。

役者2 ひどい、バクテリアなんてひどい。

役者4 もうあなたが行くしかないんです。あなたは今、使いつ走りしか有効な使い道はない。

役者2 …。

役者3 行け、裸足の使いつは。

役者2 リュック、貴様…。

役者4 だから答えたくなかったんです。

役者2 …私はあなたが待っていたこいつが待っている帽子の方を一緒に待ってなきゃならないんです。そうじゃなきゃ私はここに来た意味が無い。

役者3 帽子の方を待つのに三人も必要ないでしょう。

役者2 ヤダヤダ、行きませんよ私は。

役者3 もしあなたが行っている間に帽子の方がやってきたら、ちゃんとあなたが帰って来るの待っててあげますから。

役者2 そんなの信用出るもんですか。だって私は序列的に一番下なんです？バクテリアなんですよ？

役者4 どうせ私はバクテリアですもの。へーんだ。

役者4 裸足、いい加減にしろ！

役者2 …だって、だって、

役者4 わがままばかり言うんじゃないの！さっさと行って来いバカ！

役者2 …イヤです。

役者4 行け！

役者2 行きません！

役者4 コラ！

役者2 …うわーん！

役者4 泣きやイイって思ってたんだろ！

役者2 わーん！

役者4 裸足！

役者3 あーあ、かわいそうに、あの案内人は、誰にも引き止めてもらえずに逝ってしまった。

役者5、やってきた。赤い帽子を深くかぶり、手にはロープを持っている。  
役者1はロープを凝視したままついてきている。

役者5 本当だ、田舎真 一本の木。まさしくここに違いないというふうな気がしてくる場所だ。

役者1 そうでしょう、さあロープを貸して下さいな。

役者5 それにしてもこの木、ひどく元気が無い。病気に掛かっているのかな。

役者1 ロープを貸して下さいな。

役者5 三人も人が居る。そのうち一人は裸足で、もう一人はなんだあれは？膝から足が生えている。

役者3 皆さん、これは確認ですが、いやまず間違いないと思うのですが、あれは赤い帽子ですね？

役者4 ええ、あれは、赤い帽子です。あれが赤くないと言っなら世間はもう交通事故が止まらない。

役者2 リュック、早く声を。

役者3 ついに、赤い帽子の方がやってきた。

役者2 さあ。

役者3 待つて下さい、私は感動で涙をこらえるのに必死なんです。

役者4 ああ、リュックの方の目が真っ赤だ。

役者3 という事はなんですか？私の見えている世界は今、すべてが真っ赤に染まっているという事ですか？

か？

役者4 まさか、あれが赤くないなんて…。

役者3 自分の目が信用出来なくなってきましたよ。

役者4 そう言われると私も、もしかしたらあれは赤くないんじゃないかと思ってきましたよ。

役者2 早く声を掛けなさいよ！あれは赤いです。間違いない赤いです。ほら、行ってしまいますよ。

役者5 赤いリュックに赤い眼鏡、ふむ…。

役者1 ねえねえ、ロープを下さないな。

役者5 あなたは、なぜ裸足なんですか？

役者2 ……え？

役者4 あちらから話しかけられた…！

役者3 君、失礼な事があったてはいけません。慎重に言葉を選びなさい。

役者2 あ、あの、途中で捨てて来たんです。ボロボロで使い物にならなかったたので、

役者1 ロープを。ロープを下さない。

役者2 あ、私たちは、ずっとあなたを待つていたんです。

役者3 それは私が言うつもりだったのに…。

役者2 あなたが言わないからでしょう。

役者3 待つていたのは私であつてあなたじゃない。変な誤解をされるじゃないですか。

役者5 なぜ私を？

役者3 あ、えっと…。

役者2 ここで待つていれば赤い帽子の方がやってくると言われたのですーと待つておつたんだそうです。

す。

役者3 そうなんです。

役者2 と言つても実はそんなに待つてないんですがね。

役者3 おい誰かミシンを持つてきてくれ！この口を縫い合わせてやる。

役者5 そうですか、確かに私は赤い帽子を被つている。それは赤い帽子を被つてここに来るように言わ

れたのでそうしているのです。

役者4 私はここで待つていれば赤いリュックを背負つた方がやってくると聞いたのですーと待つてお

りました。私の場合日本本当に何日も何日も待つてきては待つていたんです。

役者5 赤いリュックの方はあなたですね？

役者3 はい、それが私です。

役者5 なるほど確かに赤いリュックだ。

役者4 その証拠に見て下さい、私は新品の靴を履いている。素人は皆ここに来るのに靴をボロボロにし

てしまふ。そんな事は分かり切つた事ですので履かずにとつておいたのです。

役者5 なるほど。あなたは相当賢い部類の人だ。

役者4 うわーい。

役者2 あ、私はこの赤い眼鏡の方を待つていました。今のところ私が一番下つ端になつておりますが

今日最初にここに来たのは私なんです。

役者5 なるほど。あなたは勤勉な方だ。

役者2 はは！。

役者1 ロープは、まだですか？

役者5 それでこの人は？

役者2 あ、その人は案内人で、お客さんを見失つてしまったので今はロープを探しているところなんだ  
そうです。

役者1 貸して下さい。

役者5 このロープをあげる代わりに田舎道に一本の木の場所を教えてくださいのですね、なるほ

どそれで、あなたは優秀な案内人だ。

役者1 ロープ頂戴したら。

役者2 お客さんはもういいんですか？

役者1 お客さんは散々探しました。なのにロープを探したら割とすぐに見つかったのでこれはもっそう

するより他に無いという暗示です。ロープ貸して下さい。

役者5 そうですか、分かりました。

役者1 ありがとう、これで私は職務を全う出来そうです。

役者4 皆さん見て下さい、靴が私と同じくらいきれいですよ。

役者3 さすがに身なりがきちんとしていらつしやる。

役者4 あなたも途中までは裸足で来たのですか？

役者3 そんな訳ないでしょう。おそらく靴を二足持っていたんですよ。

役者4 そうなんですか？

役者5 違います。

役者3 まあそうでしょうね。

役者2 ざまあみろ。

役者4 ではどうやって？

役者5 私はここにまで車で来たんです。

役者4 く、車で！？

役者2 車を通れるような道は無かったです…。

役者5 そうなんです、だからここに来るまでたくさん物にぶつかりましたよ。中でもこれは本当に思

い出したくない話なのですが、途中、イノシシの親子に遭遇しましてね、

役者4 あー、

役者3 あー、

役者2 すみません、大体検討は着きましたので、もっいいです。

役者5 そうですか…？

役者4 あ、でも一応聞かせてもらっていいですか？

役者2 え？

役者4 せっかくだから…。

役者2 そうですか？

役者3 私は耳を塞ぎます。

役者4 私だつて塞ぎますよ。

役者3 じゃあ半分だけ。

役者4 私も半分だけ。

役者2 じゃあお願いします。

役者5 イノシシの親子がね、猛スピードで走る私の車の横に飛び出して来ましてね、

役者2 横…？

役者5 イノシシというのはこんなにも速いのかと、そして親からびつたりと離れない子供達もま

たこんなにも速いのかと。

役者2 前じゃなくて？

役者5 横です。

役者2 横だそうですよ。

役者3 聞いてます。

役者2 それで？

役者5 良く見るとイノシシの親子、私に手を振ってくれているんですね。私の必死なドライブに感

心したのでしょうか、こう一定のリズムで左右に振ってくれています。

役者4 それは走ってるんですよねイノシシ？

役者5 そうです。ぶわーっと走ってます。

役者4 はい…。

役者5 まあ、実際イノシシに聞いた訳ではないのでもしかしたら手を振っている訳ではないのかもしれ

ませんが、私には手を振ってくれているように感じました。

役者4 …どうしても私、絵が浮かばないんです、四足で走っているのに手を振っている…？うーん。

役者3 これはイメージの話でしょうか。

役者2 それで、どうなったんですか？

役者5 嬉しいなあと思いました。

役者2 はい。

役者5 手を振るイノシシです。

役者2 それがどうして思い出したくない話なんですかね？

役者5 イノシシの親子に手を振り返していたら私、巨大な大木に正面からぶつかってしまいましてね、

どカーンと。そしたらエアバッグが膨らんだんです。私はエアバッグが邪魔だね、邪魔だなあと思いな  
がら運転する事になったんですね。

役者2 大丈夫だったんですか？

役者5 なんとかね。

役者4 巨大な大木は意味が重複しています…。

役者3 それくらい巨大だったという意味ですよ。

役者5 車は血だらけになりながらなんとかそこまで走ってきたのですが、ちょうどそのところで全く  
動かなくなってしまったんです。

役者3 エンジンオイルが飛び出たんでしょう。擬人化していらつしやるんだ。

役者5 違います。

役者2 違うそうですよ！

役者5 森で一番危険なのは猿です。私は次に猿の群れに遭遇しました。

役者4 猿？

役者5 その中のボス猿らしきひとときわ大きな猿が、運転席の方に飛びかかって来ましてね、

役者4 え？

役者5 うわーって思ってた。だってもうサイドガラスはバリバリですからね、猿はそのまま後部座席に座  
ったかと思うと、周りの猿達は一斉に声を上げて、私の車を押ししてくれました。

役者4 おお…。

役者5 車のサイドガラスがバリバリに割れているという事は、フロントガラスもバリバリに割れている  
ということ、さらにリアガラスもバリバリに割れていました。猿達はそのガラスに手を掛けるものだ  
からみんな手を切ってたね…。

役者3 うー…。

役者5 想像してみてください、割れたガラスに手をつけて横にスライドさせる感覚を。

役者2 いや、ん…。

役者4 痛い、痛いです。

役者5 「もうやめてくれーもういいからやめてくれ猿ー」と叫んだんですが、ボス猿は群れを鼓舞する  
かのように暴れだし、そのたびに猿達は私の車を強く押ししてくれるんです。猿の手にはガラスの破片  
が突き刺さり、リアガラスは血で真っ赤に染まり、それをイノシシの親子は手を振りながら見ている、  
小鳥はさえずりフクロウは寝ていました。

役者2 なんですすかその光景は…！

役者4 変な感じがします。

役者5 そうでしょう？まるで甘いのと辛いのを一緒に食べたような、奇妙な話でしょう。

役者4 はい。

役者2 はい。

役者3 はい。

役者5 そうこうしているうちに彼の準備が整ったようです。

役者1 それでは皆さんすみませんが、お客さんが来たら私は結構探したとお伝えください。向こうには  
二度、あっちにも一度、あなたを最後にお見かけたこの場所には二度も来ました。それでもあなたは  
見つからなかった。私はもう逝きます。とね。

役者4 あなたは短気な人ですよ。一度二度と見つからなければ、四度五度と探せばいい。

役者1 四度五度と探したら、六度七度と探さなきゃいけなくなるんです。それはきつと終わりが無い、  
永遠に居ない人を探し続けるんです。

役者2 町の本屋に行けば、「正しい待ち方」という本が売っていますから、それを読んだ方がいい。

役者3 あ、それはどんな事が書かれてあるのですか？

役者2 知りません。

役者3 え？

役者2 読んだことがないので。

役者3 なんだ…。

役者4 お客さんが居なくなったと言ってもこの辺りから居なくなっただけで、きつとどこかに居ますか  
ら。諦めないで。

役者1 もう言わないでください、私はこういう人なんです。それではお元気で。

役者5 ここだけの話、あの人はなんだか変な匂いがしますよ。

役者2 あ、その話はあとで…。

役者5 なんの匂いなんですか？

役者2 それは後で…。

役者1 いいですよ、気を遣って頂かなくても。これは足の匂いです。出かけてからここに来るまでずっ  
と靴を脱いでいないので、すいませんでしたね臭くて。さようなら。

役者3 彼の足が臭いということは、誰にも言わずにおきましょう。

役者4 そうですね、ここだけの話にしておきましょう。

役者1 黙っていても近づけばわかる話です。私の身体はもうひどく臭い。こんな身体に用は無い。それ

では。

役者5 バカもの！

役者3 …帽子の方？

役者5 このバカもの！

役者1 …。

役者5 バカもの！

役者3 身体に用が無いとは何事か、肉体は借り物であつてあなたの物ではない、あなたから肉体を放棄

するなどあつてはならん事だ。この方はそう言いたいのです。

役者5 違います。

役者3 違います。

役者2 ざまあみろ。

役者3 全然当たらない。ではなんと？

役者5 それでは君、輪っかまで届かんではないか。

役者3 え？

役者1 …ロープが思ったより短かつたんです。だから輪っかがあんなに高くなつてしまつた。

役者5 それでどうやつて輪っかに首を通すつもりですか？

役者1 …えい！えい！

役者2 …いやいや、飛んだつて全く届く心配もないですよ。ものすごい高いですよ。

役者1 んがー！

役者5 誰か、肩車をして差し上げたら？

役者1 ああ、それは助かります。お願いします。

役者3 じゃあ眼鏡の方、お願いします。

役者4 私ですか？

役者3 ええ、あなたは靴を履いているから。

役者4 …いや、私よりも裸足、君がやるのがちよつどいい。手伝つてあげなさい。

役者2 なんです、イヤです。絶対にイヤです。

役者1 お願いします、手伝つてください。

役者3 ほら、彼の最後のお願いです。

役者2 イヤですよ！…だつてあの人は足が臭いんですもの。

役者4 そんな事を言つてゐる場合ですか。さあさあ。

役者2 イヤです、そんなのイヤです。

役者5 お願いします、裸足の方、どうか、どうか。

役者3 ほら、帽子の方が頭を下げてらつしやるんだぞ。

役者2 …そんなあ、ヒック、ヒック。

役者4 また泣くう。

役者2 だつて…。

役者1 すいません、なんかほんと、すいません。

役者2 だつて臭いんだよお…。

役者1 まだ臭くないでしょう。もう少し近づいてからが本当に臭いんです。さあ。

役者2 ああー臭いよお、もう臭いよお、ヒック。

役者5 泣くな裸足の！今までもつと辛いことは幾らでもあつたはずだ！

役者2 あー、臭い、臭いです！…ここまで来ると二段と臭いんです！ほんとです！

役者3 鼻を塞ぐんだ。

役者2 そうしたら口で息をしなきゃならないですよ。それはそれでイヤなんです。口で吸つたら臭い匂

いが内臓にひつつくじやないですかあ！

役者5 匂いがひつつくわけないだろう。

役者1 なんとということでしょう、人生で死ぬ前が一番傷ついている…。

役者2 あはーん、ははー！臭いよお。

役者5 戻つてくるんじゃない。

役者2 助けて下さい…。

役者5 もしここに、私以外誰も居なかつたら、私が君の役をやつていただろう。

役者2 え？

役者4 私も、もしここに私以外誰も居なかつたら私が君の役をやつていたはずですよ。

役者3 私も、もしここに

役者2 もつわかりましたよ！…やりませよ！やればいいんですよ！

役者5 そつという事です。

役者2 うがー！

役者1 ああ、すみません、このご恩は一生忘れませんから。

役者2 あと数分で忘れちゃうつて事じゃないですか、あー、早く。あー、はあ…。

役者1 ああ、もつ少しです、もつ少しで届きます。

役者2 うー…、あー…、ひー…、

役者1 あー、あー、もう少しですよ！もう少しです！

役者2 うー…、

役者3 さあ、帽子の方、我々は行きましょう。こんな辛い光景を最後まで見てられない。

役者4 そうですね、そうしましょう。

役者2 待って下さい！待って下さい！行かないでください！君、まだですか？早くしてえ。

役者1 もう少しなんです、あともう少し上がりませんか？

役者2 ー…！

役者4 帽子の方、ほら行きましょう。私はもう充分待ちました。リュックの方はあなたについて行くの

です、私はリュックの方について行くのです。

役者2 私はあなたについていきます！早くうー。

役者1 もう少しです！

役者5 いやダメです。リュック、眼鏡、最後まで見て行きなさい、これが人間です。

役者2 ー…！もうまだですかあ！

役者1 もう少しです！

役者2 ー…！

役者3 でも…、これはあまりにも辛すぎる。

役者2 うー、んー…、

役者1 さあ、もう少し、もう少しです！

役者2 いい、んにゃー…！

役者5 がんばれー！がんばれ裸足！

役者3 がんばれー！がんばれー！

役者2 ー…！

役者1 ー…！

役者5 がんばれがんばれ裸足！

役者3 がんばれがんばれ裸足！

役者4 …これは、全く届きませんね…。

役者3 うん、全然もう少しじゃない、がんばれという声援も虚しい。

役者2 えー？！そうなんですかあ！うわーもうダメだ、気が変になりそうです。

役者1 …あー、もう少しのところだったのに。

役者2 はあはあはあ、きれいな空気を、誰かきれいな空気を！

役者5 やれやれ、どうしてあんなロープのつけ方をしてしまったのか…。

役者1 …悔しい、僕は本当に、最後の最後までダメなまんまだ。

役者3 もう諦めなさいな。おとなしくここで待つことです。

役者4 お客様はもう帰ってしまったんですよ。

役者1 …どうして？…ここまで来てどうして？

役者3 我々はどう行きます。後悔しているなら待つといい。…ここでお客様が来るのをずっと。

役者4 …きげんよう。

役者2 …きげんよう。

役者1 怒られる、どうして探さないんだものすごく怒られる…。

役者3 帽子の方？

役者5 はい。

役者3 さあ、行きましょう。

役者5 …どこへ？

役者3 …どこへ？

役者5 …どこへ？

役者3 さあ？

役者5 私はどこへも行きませんが？せつかくここまで来たんですから、そう簡単に帰るものですか。ど

こ…こ…こ…。

役者3 …帽子の方？私はずっとあなたを待っていたのです。

役者5 はい。

役者3 だから行きましょう。

役者5 うん、行きましょうと言われても私はここで人を待っているのですね。

役者2 え？

役者4 え？

役者5 その為にわざわざここまでやってきたんであってね。

役者3 …ぼ、帽子の方？あなたは誰を待っているのですか？

役者5 私は、赤い靴を履いた人が来るのでその人を待つように言われたのです。

役者3 赤い靴…？

役者5 田舎道、一本の木、夕暮れに。…ここだと思うのですがね、他にもあるのかもしれないが…。

役者4 そんなあ、まだ先があつたなんて…。

役者2 はい。

役者3 なんですか？

役者2 私、赤い靴です。

役者3 …は？

役者2 私、赤い靴を履いてました。

役者3 …何を言っているんだい、君は裸足じゃないか。

役者2 捨てて来たんです途中で。

役者4 それは本当なのかい？

役者2 本当です、捨てて来たんです。

役者4 そうじゃない、君の履いていたのは本当に赤い靴だったのかい？

役者2 本当です。赤い靴を履いてここまで来るように言われたんです私。

役者3 言われたんならなんでもちゃんと履いて来ないんだよ。

役者2 ボロボロになつてしまつたんです。こんなボロボロでは恥ずかしくてお見せ出来ないと思つて、つて言う話は散々したじゃないですか。

役者3 なんでその時赤い靴だと言わなかつたんだ。

役者2 聞かれなかつたから…。

役者3 聞く訳ないでしょうがそんなの、

役者5 そうですか、あなたでしたか、赤い靴の方は。

役者2 はい、私です！

役者3 ちよつと待って、証拠は？証拠はあるんですか？

役者2 証拠つて言われても…。

役者3 見て下さい帽子の方、こやつは裸足ですよ。こんな奴があなたの待ち望んでいた人はずがない。

役者5 うーん…？

役者2 靴、どこに捨てたつけなあ…、その辺だと思つてはよね。

役者4 どうして捨てちゃうかなあ…。

役者3 君が赤い靴を履いていた証拠なんてどこにもない、言えはいいつてもものじゃないんだ。

役者2 じゃあいいですよ、ちよつと待って下さい、私探しに行つて来ますから。

役者3 行つて来い。さ、我々はもう行きましよう。

役者2 いいんですか？あなたは赤い靴の方を待つてゐるんですよ？

役者5 そうなんです。

役者2 ほら。

役者3 …くそ、これは本当に現実なのか？

役者2 やつたり、大逆転だ。

役者3 うるさい黙れ裸足！裸足のくせに！

役者2 いいんですかそんな事言つて。あなたは今、バクテリアにくつついてくるなんか小さい物の、さ

らに小さな良く分からない存在なのですよ？

役者3 はあ？

役者2 胡桃、あげましようか？

役者4 まあまあ、お二人とも、

役者3 違つたろうが、君は私にくつついてくる眼鏡の…あーもう知らん！どつか行け、臭い。

役者2 どうして私まで臭いんですか。

役者3 君からは案内人の足の匂いがする、しつし。

役者2 匂いは移らないでしょ？

役者1 うん、そうか、生きるという事はこうして傷つくことに耐えていく事なんだ…。

役者4 そして案内人はレジャーシートを取り出した。

役者1 どうぞ、地べたに座つていたんではズボンが汚れます。

役者5 あ、いいのですか？

役者1 途中で休憩する為を持ち歩いていました。

役者5 あなたはやはり優秀な案内人だ。

役者4 まさか君…、

役者5 どのこいしよと。

役者1 お客さんはずーつと休憩取らない人でしたから、ようやく使えました。

役者4 君も座るんですか？

役者1 え？

役者4 帽子の方、そこから逃げて下さい！

役者5 え？

役者1 何がですか？

役者4 そう言うと案内人は、靴を脱いだ！

役者3 びーん…！



役者2 ぶふううわー！

役者5 う、く、苦しい…

役者1 あー、これはひどい、我ながらひどい！

役者3 帽子の方！

役者5 かはっ…、か…、くあ…

役者3 誰か、誰か帽子の方を！

役者2 無理です、ここからでは近づけません！

役者1 ああああ、大丈夫ですか？

役者4 そういうと案内人は靴を投げた。

役者1 ぼーい。

役者3 なんてだー！？

役者1 ぼーい。

役者2 うはあああああー！

役者1 あー、極楽極楽。

役者3 何を言っているの周りを見てしろ！この阿鼻叫喚の世界を！

役者4 案内人はその時、地獄に降り立った魔王のごとくすがすがしく微笑んだのです。

役者2 帽子の方が、帽子の方が…！

役者3 頼む！君、もうどこかへ行ってくれ！川へ、川に行ってくれ！

役者1 ちよっと待って下さい、私なんだか眠くなって来ました。

役者3 寝るんじゃない！

役者1 あー、靴を脱ぐという事はこんなにも解放された気分になるんだ…。

役者4 帽子の方！帽子の方！

役者5 …。

役者4 ダメだ、気絶してしまっ…。

役者3 案内人！良く聞くんた。落ち着いて、ゆっくり、最後のひと踏ん張りで立ち上がってみるんだ。

役者1 いやダメです、座ったらもう立てませんもの。

役者3 出来る！君なら出来る！君は優秀な案内人なんだろ？

役者1 ふあーあ。

役者2 あなたよくこんな状況で寝られますね！

役者1 私にはもう少し力が残ってない…、帽子の方をどうすることも出来ません。

役者3 無責任な事を言うんじゃない！

役者4 …鼻歌を歌っている。

役者2 なんておそろしい男だ、

役者1 もう陽が暮れる。夕暮れはホントあつという間に過ぎて行くんだな…。

役者3 案内人ー！

役者1 …。

役者3 案内！

役者1 …。

役者3 クソ…。

役者4 うつ、風が出てきましたよ。

役者2 帽子の方…？帽子の方…？

役者4 おならは、空気が重いと聞いたことがあります。足の匂いもそうだとしたら立った方がいい。

役者2 はい！

役者3 これは泣いているのを隠している訳じゃないですからね、鼻を出来るだけ高い位置にキープして

いるだけです。

役者2 …私、靴を探しに行つて来ます。

役者3 それでどうするんだい？

役者2 帽子の方は靴を履いている私を待っていた、そうしたらみんなで一緒に帰れます。

役者3 それはわかりますが帽子の方は気絶しているんです。

役者2 帽子の方、私が靴の人です、帽子の方！

役者4 あなたは私を待っていたんじゃないのですか？

役者2 はい、そうしたら…。

役者3 あなたは私を待っていた。

役者2 そうしたら…。

役者3 私はあの人を待っていた。

役者4 「正しい待ち方」が書いてある本には、何と書いてあるんでしょう…。

役者3 …よしわかった、行って来なさい。靴を、探しに行きなさい。私も君が赤い靴の人かどうか確かめてみたいんだ。

役者2 わかりました！…。

役者3 どうした？

役者2 前方に靴があります…。

役者3 では反対の道だ。

役者2 あつちにも片一方の靴があります。

役者3 …なぜあいつは靴を投げたんだ。

役者4 本体が真ん中にあつて両方の靴が端と端にある。これは過酷な環境ですぞ。

役者2 もつ夕暮れじゃなくなる。ここには誰も来ない。なのに我々はここから動けない…。

役者3 眼鏡の方、あなたなら靴の脇を駆け抜けて行けるのではないですか？

役者4 え？

役者2 そうだあなたは靴を履いている。我々よりも俊敏に動けます。

役者4 いやしかしこれはいざという時の為に…。

役者3 お願いします眼鏡の方、ファブリーズを買って来て下さい。

役者4 …でも、

役者3 お願いします。

役者2 お願いします！

役者4 …山で消臭剤を撒くなんて、自然に喧嘩を売るような事になりはしませんか？

役者2 ちよつとよくわからないんですけど。

役者3 さあ、もう暗くなつてしまいます。

役者2 この道をあつちかあつちへ行けば都会へ出られるそうです。真つ暗になつても町の光を頼りに進めるはずですよ。

役者4 …しかしですね、

役者3 今がいざという時ですぞ。

役者4 こんな時に、散々待つて私は一人で行くのですか？

役者3 いざ！

役者4 んー！

役者4 靴の脇を駆け抜けて行つた。

いつの間にか辺りは夜になつている。

役者2 行つてしまった…。

役者3 行つてしまったね…。

役者2 さて、我々はどうやって眼鏡の方を待つていましょうか…。

役者3 「正しい待ち方」が書いてある本はね、私に赤いリュックを背負つて赤い帽子を被つた人を待つように教えてくれた人が持つていたんです。

役者2 私も、赤い靴を履いて赤い眼鏡の人を待つように教えてくれた人がその本を持つていました。

役者3 そうでしたか…。

役者2 正しい待ち方つてなんでしょう？あの案内人の方はどこかへ呼びかけたりしていましたがあれは

良くないと思うのです、あれはきつと正しくないと。

役者3 呼びかけてはいけません。探しに行くなんてもつての他です。

役者2 あとイライラも良くないと思つんです。足をボタンボタンするのはいけません。

役者3 しかし「待つている」、というポーズも大事なんですよ。

役者2 それは「待つている」という事を誰かにアピールする為ですか？

役者3 そうではなくて、待つている事を自分で忘れない為ですよ。

役者2 え？

役者3 おそろくですよ、正しい待ち方というのは、待つている事を忘れない事だつと思つますね。我々は長い間待つていていつの間にか忘れてしまつますからね。日をまたいだだけで忘れてしまつた人だつて居るんですから。

役者2 なるほど。

役者3 それから待つている時間を潰そうとしてはいけませんね。待つ時間はちゃんと待つていないといけません。

役者2 他（こと）をしてはいけません。

役者3 そうは言いませんが、熱中してはいけません。これから大事な事は、眼鏡の方が戻つてくるかといつ事より、我々がちゃんと待つていられるかといつ事です。

役者2 え？

役者3 眼鏡の方が戻つて来ても、我々がもうここには居ないかもしれません。この匂いが消えたら、眼鏡の方を待つていたことを忘れてしまつてもいいかもしれません。

役者2 …そんな事を言われると、この匂いも愛おしく感じたり…はしませんね絶対。

役者3 それはいいです。

役者2 今ちよつとクンクンしそつになりました私。

役者3 危ないところでしたね。

役者2 はい。

役者5 (むっくり起き上がり)なるほど、「正しく待つ」とはそういう事が、もう少しで本質に近づけそうに感じですね。

役者2 帽子の方！

役者5 しかしそもそも人はどうして簡単に忘れてしまうのか、という…うっ。(寝る)

役者2 帽子の方！帽子の方！

役者3 …良かった、命に別状はないようですね。

役者2 はあ…。

役者3 では、眼鏡の方を正しく待つとしますか。

役者2 あ、はい。

役者3 …。

役者2 あ、とりあえず立ってるんですね。

役者3 正しく待つのに寝転がってはいかんでしよう。

役者2 はい。腕組みは？

役者3 いいですよ。でも怒ってるみたいな顔しちゃダメです。

役者2 肩が凝りますね。キョロキョロとしてみます。

役者3 いいですが、長くは持ちませんよ。

役者2 難しいなあ…。

役者3 だらんとしましょう。

役者2 そうですね？

役者3 まっすぐ前を向いて、口は半開きにしましょう。

役者2 虫が入って来そうですね。

役者3 表情を柔らかく、これが基本です。

役者2 うん、これなら楽です。

役者3 しかしこれでも限界はありますね。

役者2 ええ。

役者3 ちょっとだけ木にもたれてみましょう。

役者2 あ、いいんですか？そんな事して！

役者3 ほら、待っているように見えませんか？

役者2 いや、見えます！もの凄く見えます！

役者3 そうでしょうそうですね。

役者2 これはいい！今のところベストの態勢です。

役者3 …。

役者2 …眠くなって来ました。

役者3 ダメだね、態勢がベスト過ぎるんだ。

役者2 しりとりでもしませんか？

役者3 いいですね。

役者2 しりとり。

役者3 りす。

役者2 すり。

役者3 「り」で攻める気でしょうもついいです。

役者2 早いなあ。

役者3 しりとりはダメです、二人居る場合にしか使えないから。

役者2 じゃあ…、あ、ア리가居ますよ。

役者3 ああ、これはイイねえ。数えましょう。

役者2 一、二、三、四…、あ、二列になってしまった。

役者3 じゃあ私はこちらを…、君はこちらを…、一、二、三、四…

役者2 一、二、三、四…、リュックの方？

役者3 五、六、

役者2 リュックの方？

役者3 なんです？七、八、

役者2 これはダメです。待っているというより、「アリを数えている人」になってしまいます。

役者3 あ、そうか！危うくダメな待ち方をしてしまうところだった。

役者2 これはなんとなく数えないとダメなんですよきつと。

役者3 そうですね。なんとなく、いい加減に、片手間に…

役者2 ええ。

役者3 ふーん、三か四か…、ぎゅと一〇…、はい二〇…、まあこの辺わーっと居て、

役者2 すいません。

役者3 ん？

役者2 …これはなんですか？

役者3 …やはり難しいねえ、正しく待つ事は。

役者2 一体どのように待つのが正しいのか、あの本には何が書いてあったのか…。

役者3 うん、…皇を見る、

役者2 …虫の声を聞く、

役者3 …木々の揺れる音を聞く、

役者2 …風を感じる、

役者3 時間が流れて行く、

役者2 夜も更けて、…やはりだんだん眠くなって来ましたよ。

役者3 そもそも、どうして寝ちゃいけないんでしょうね？

役者2 そうですとも、寝たついでいいでしょうよ忘れなければ。

役者3 そうですすね、寝ても忘れなければね…。

役者2 果報は寝て待つという言葉もあるくらいですから、一晩くらいじゃ忘れませんとも。

役者3 …じゃあ、寝ますか？

役者2 そうしますか？

役者3 …。

役者2 寝ますか？

役者3 …。

役者2 え、もう寝ました？

役者3 …。

役者2 早い！…なんて早いな。

役者3 今日本当に疲れてしまった。久しぶりにいろんな事があったからね…、

役者2 そうですすね…。

役者3 おやすみ。

役者2 おやすみなさい。

役者5 (起き上がり) それで寝てしまったんですか？…寝てしまいました？…寝てしまった、ようすね。

役者5、帽子を脱ぐ。

役者5 帽子も、リュックも、眼鏡も、靴も、何も無い。我々は、何を目印に待てばいいのかわからない。

そんな状態にならないと、正しく待つことは出来ないのではないのでしょうか？

役者1 あ！お客さん？…お客さん！どこに行つてたんですか？

役者5 シー。

役者1 もお心配しましたよお。おしっこですか？どこまでおしっこに行つてたんですか？そんなにお

しっこ出っぱなしだったんですか？年寄りはいれだから…

役者5 …ん？

役者1 …。

役者5 寢言か。もの凄いはっきりした寢言だな。

役者3のリュックを持って、どこかへ去った。

夜が明けていく。

役者1 違います、寢言じゃないですよ。ちゃんと起きてますよ私は。私は寢言を探していたんですから。今だつてこうしてあつちへ(こつちへ)あつちへ(こつちへ)…

役者2 じゃああなたは何度もここに来ているんですか？

役者1 そりゃあ私は案内人ですからね。なんとなく歩いててもここに来てしまつてますよ。

役者2 だって他にも似たようなところがあると行ってませんかでしたっけ？

役者1 だからそれは似たようなところなんですから行つてるかもしれないですけどね、

役者2 じゃあ(こ)かどうかも分からないじゃないですか。

役者1 どこだつていいんですよそんなの、似たようなところなんですから(こ)と同じですよ。わかりや

しませんよたつてどうせ何しに来てるのかわからない連中なんですから(こ)に来る人なんて。

役者2 おしっこ。

役者1 (こ)に来るとすぐみんなおしっこに行くんです。そんなに(こ)は尿意をもよおす場所なんですか

ね？

役者3 あ、もう朝だ…。

役者1 私は全くしたくならないんですけどね、みんな山の神様に怒られるがいいんですよ。

役者3 よつこいしよと。

役者2 山の神様に怒られたからお客さんはどっか行つちやうんですか？

役者1 神隠しじゃないですか、怖いじゃないですかやめて下さい。

役者2 おしっこ。

役者1 あなたも神隠しですよ。

役者3 あれ？

役者1 今日はいい天気ですからね、

役者2 あー、いい天気。

役者1 きつとまだどこかの誰かがここに来たいと言ってます。そしてまた夕暮れになったら私はその人

をここに連れてくるんです。今日こそはおしっこに行かせないようにしよう。

役者3 起きて下さい。もしもし？

役者2 それがいいですよ、だつておしっこ行くと居なくなるんだつたら

役者3 起きて下さい。

役者2 なんですか？

役者3 もう朝です。

役者2 はい。

役者3 起きて下さい。

役者2 もう起きてますよ私は。

役者3 起きて下さい。

役者2 起きて…は…！

役者3 おはようございます。

役者2 は…あ、ああ、おはようございます。

役者1 おはようございます。

役者3 ものすごい寝言言っていましたよ。

役者2 あ、私ですか？え、すいません…。

役者1 それ寝言だったんですか？私寝言で会話しちゃいましたよ。

役者3 あの人も、起こした方がいいですかね。

役者1 よく言いませんか、寝言で会話しちゃ良くないつて。

役者2 あれが寝言ですか…？！

役者3 あなたもあんなでしたよ。

役者1 寝言が増えるつて、寝言が。

役者3 寝ててイイですよ。

役者1 そつですか？

役者3 おやすみなさい。

役者1 やすみなさい。

役者2 ひどい寝言だ…。

役者1、でたらめな歌を歌いだす。

役者3 朝 この場所に居ると、全然違う場所みたいだなあ…。

役者2 あー、痛い。背中から足から…。

役者3 さつと、じゃあ私は行きますね。

役者2 あ、行きますか？

役者3 もう朝ですから。

役者2 あ、じゃあ私も、そつします。

役者3 …ひどい歌だ。そりゃあこの木も元氣無くなりますよ。

役者2 あれ？

役者3 ん？

役者2 なんだろう…、私は誰かを待っていた…という夢を見ていたんですかねえ？

役者3 はあ…それはあなたの夢ですから、私にはなんとも…。

役者2 うーん…。

役者3 じゃあ私は、これで。

役者2 あ、はい。

役者3 じゃあ。

役者2 あ、私はこつちへ。

役者3 あ、はい。

役者4、「なぐり雪」を歌いながらやつてきた。

赤いリュックを背負っている。

役者3 また歌だ…。

役者2 おはようございます。

役者4 おはようございます。

役者3 おはようございます。

役者2と3、去って行った。

役者1 田舎道、一本の木、夕暮れ。なんなんだみんなして。よしよと。あいたたた、あー、裸足で歩

くのはこんなにも辛い事なのか…。あいたたた、

役者4 ん、なんだこの匂い？

役者1 …え？

役者4 わ、歌うことも出来ない。これか。

役者1 あ、それ私の靴です。ちよつと待って下さいね。

役者4 うっ、ひどい。

役者4、リュックから消臭剤を取り出して、

役者4 こんな時の為に持ってきておいたんですよ。山で消臭剤を撒くなんて、実におろかな一日だ。

役者1 あれ？どこかでお会いしました？

役者4 え？

役者1 …赤いリュック？うーん…？

役者4 あなた、眼鏡持ってませんか？

役者1 …目は、いい方なんです。

役者4 そつですか。

役者1 あいたたた、あ、こっちにも掛けて下さい。

役者4 うっ…、

役者1 すいません。

役者4 なんだらう…、今日は早目にここに来ないといけないと思ったんですね。

役者1 はあ。

役者4 それがなぜだったのか思い出せなかったんですが、こうしていると、なんだかこれが目的だった

よっつな気もしないでもない。

役者1 私の靴に消臭剤を掛けるのが目的？

役者4 …。

役者1 あ、足にも直接…？

役者4 …。

役者1 あー、気持ちいい。

役者4 私は早起きをして、何をやっているんだ…。

役者1 あー、

役者4 田舎道、一本の木…夕暮れまで、何をして過そつか。

役者1 あー、気持ちいい。

役者4 …あなたこれ、自分で掛けたら？

役者1 あー、

役者4 ねえ？

役者1 あー、

役者4 ねえ？

田舎道、一本の木。

夕暮れまではまだ…

〜終〜

この戯曲の著作権は、作者である中塚直隆にのみ帰属するものです。  
上演許可あるいはその他のお問い合わせは、作者の所属する「オイスターズ」へどうぞ。

■ オイスターズ ■

ホームページ

<https://oysters.official.jp>

メールアドレス

[theatrical\\_unit\\_oysters@yahoo.co.jp](mailto:theatrical_unit_oysters@yahoo.co.jp)